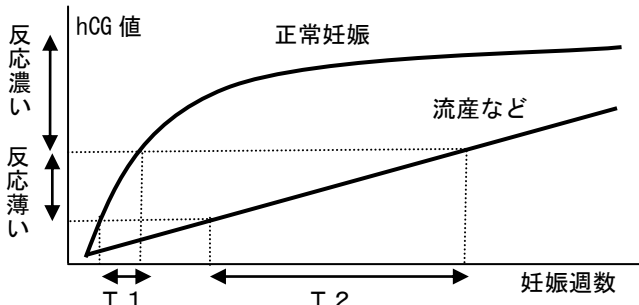


は 判定の色が薄けちゃ要注意

《妊娠検査薬》

今から約 25 年前、妊娠検査薬が初めて市販された時、「産婦人科医の仕事が減ってしまうのではないか」という狭量な心配がありました。しかしこれは全くの杞憂でした。妊娠されて病院を受診した方が、「〇月〇日に初めて市販のテストが陽性でした」と教えて下さることで、診断に非常に参考になるのです。そして何よりも、重症の子宮外妊娠が減ったことが最大のメリットでしょう。女性がご自分で簡単に妊娠を把握できることで、病院を早めに受診されるようになりました。万一運悪く子宮外妊娠であっても早期に診断し対応できます。昔は妊娠と気付かずに、子宮外妊娠が破綻して腹腔内に多量出血をし、ショックで担ぎ込まれるケースが頻繁でした。

もし妊娠判定薬を使用して(+)であるが色が薄い場合、注意が必要です。下の模式図のように正常妊娠では妊娠反応の数値(hCGというホルモンの値)が妊娠週数とともにぐんぐん上昇していきませんが、流産、子宮外妊娠などの異常妊娠では立ち上がりやゆっくりです。正常妊娠では反応が薄い時期はごく短期間(T1)ですが、流産などではT2のように長くなります。妊娠反応が薄かった場合、正常妊娠だがたまたま薄い時期に検査を行った可能性もありますが、流産などの異常妊娠である確率が妊娠反応が濃かった場合よりは高くなるのです。よく担当医に診てもらってください。



妊娠判定薬には妙な思い出があります。現在の判定薬は尿に少し漬けるだけでよく、陽性の場合ご丁寧に「+」の印まで出て明快です。30年前のものは、スライド板に尿を垂らしてそこに試薬を加えると、陽性の場合白い凝集が生じるというスタイルでした。妻の月経が遅れ「すわ妊娠か」と思った時、病院からこの試薬一式を持ち出して検査しました。幸い凝集が出て「陽性」でした。しかしその瞬間「待てよ、この試薬の容器の中に誤って妊婦さんの尿が混ざっていて、常に陽性が出る状態になっているのではないか？」という不安が頭をよぎりました。そこで、自分の尿を検体として検査を再度行なったところ、結果は見事に陰性でした。この時点で妻の妊娠は100%確実となったのです。こういうのを医学の世界では「陰性コントロール」と呼んでいます。

もっと昔は妊娠判定薬さえ存在しませんので、初期の妊娠の診断は大変だったろうと想像されます。内診による子宮のわずかな軟化や形の変化、子宮の出口の色調の変化で診断したのです。昔の先生の研ぎ澄まされた内診の技術には脱帽です。どうしても必要な時は、患者さんの尿を雌のウサギに注射してから開腹し、卵巣に排卵の跡があれば陽性としたそうです。お腹は再度閉じるとはいえ、ウサギもいい迷惑ですよ。

に 妊娠の初期は出血まれじゃない

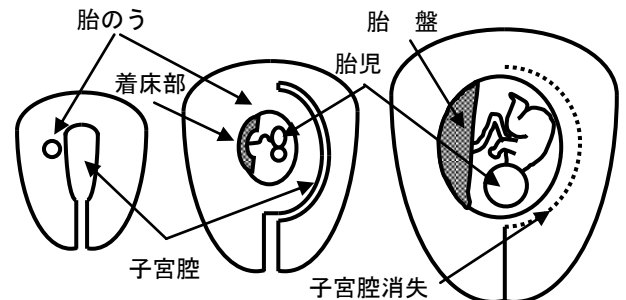
《切迫流産》

30 年余り前の話ですが「今後出産が減るのだから産婦人科なんて仕事なくなるよ」と言われたものでした。確かに出産数は減りましたが、それ以上に産婦人科を専攻する人が減り、かつ1例1例の妊娠・出産で行うべき検査等が増えているため、結果的に仕事量は昔より莫大に増えています。

当直をしている時、お産で起されたのなら仕方ないと産科医は思います。それなりに社会に貢献した満足感と適度な疲労感から、処置が済めば当直室に戻ってすぐ眠りにつけます。しかし妊娠初期の妊婦さんが出血で受診したために起された時は、成果の低い診療ゆえの不消化感から、診察は10分なのにそのあとなかなか寝付けられないこともしばしばです。

「妊娠初期の出血では、すぐ病院へ行くより家で安静にしていた方がいい」というのはほぼ例外のない「真理」です。出血すると流産が心配ですが、流産の原因の7割は直しようのない胎児の異常です。それ以外の原因でも、流産を薬などで止めることはできません。「あの晩病院に行っていれば良かった」とか、「病院に行かなかったから流産した」ということではないのです。もちろん病院に行って診察を受け、異常がなくて安心するというメリットはあります。でも妊婦さんも夜中にバタバタして大変ですし、当直医も上述のごとくダメージを受けます。出血で心配という程度なら、少し思いとどまっただけであれば、お互いのために良いでしょう。もちろん具合が悪いほどの出血ならすぐお越しください。

おそらく約3割の妊婦さんが、妊娠初期(6~8週)に一度は出血を経験します。なぜそんなに出血が起こるのでしょうか。子宮に到達した受精卵は子宮の内腔に付くのではなく、子宮内膜に埋没して着床します。図左のように子宮腔の左側に着床したとします。エコーでは丸い袋状の構造として観察され「胎のう」と呼ばれます。胎のうはどんどん増大し、図中のように先端が着床部となり将来胎盤となります。子宮腔は右側に圧排されていますが、依然スペースとして残っています。妊娠12週頃になると図右のように子宮腔は癒合して消失し、安定期と呼ばれる時期を迎えます。妊娠6~11週では、着床部ではなくこの子宮腔のスペースからの出血がしばしば起こるのだらうと思われれます。お城に例えると、本丸ではなく外堀から出血しているイメージです。



このように、病院へすぐ行ったからといって流産が治ることはない、妊娠初期は3割の妊婦さんは出血を経験する。この2つの事実を頭に置かれ、夜中に出血があってもあわてず、胎児は元気だと信じて、様子をみていただければ幸いです。